



泉丘SSHだより



第5号 H22.7.12
 編集：SSH推進室
 発行責任者：浅田秀雄

石川県立金沢泉丘高等学校



人間科学特別講義



妊娠と出産 助産師の立場から

国民健康保険小松市民病院
 助産師 首田 由利子 先生

6月24日（金）に国民健康保険小松市民病院 助産師 首田由利子先生による人間科学特別講義が理数科1年生を対象として行われました。この講義では、人間として母親のおなかの中で生命を宿したときの営みの話や現代の妊婦がおかれている環境についてお話をいただきました。



★今回初めて『助産師』という職業を知った。助産院とって、赤ちゃんを産むための病院があることに驚いた。そして新しい生命の誕生を常に間近に感じられるこの仕事は、とてもやりがいのあるものだった。

よくニュースなどで、病院をたらい回しにされ出産するのが困難になってしまう妊婦さんがいるということを知る。実際に、産婦人科医の減少や病院の管理体制の甘さなど対策を立てていかなければならない問題が多くあるということがわかった。

また、妊娠しても簡単に中絶を選んだりする人も多いと聞く。

それは何故だろうか？と疑問に思ったと同時に、そのようなことを繰り返すと、本当に赤ちゃんが欲しいと思ったときに産めない体になってしまうのではないかと。私はこのような事があってはならないと思う。首田さんのお話を聞いて、考えさせられることがあった。「まだ高校生だから」という考えは捨てて、一つ一つ物事にちゃんと向き合って生きていきたいと思う。

★私はこれまでの人間科学の授業で、ヒトはなぜ死ぬのか、ということとヒトはどのようにして生まれるのかということについて、学習してきました。今回も、ヒトが生まれてくるために身につけた能力や、そのヒトが生まれてくる様子の大変さについて知ることができてよかったと思います。私は以前、母から兄と比べてお前はスルッと早く生まれてきてくれたから気持ちがよかった、と言われたことがありますが、実際に自分が生まれた日の記録を調べてみると、出産にかかった時間は少なくとも1～2時間ぐらいと分かり、やはり非常に大きい苦痛であったのではないかと考えています。

私は兄と妹が1人ずついる3人兄弟ですが、全員が無事に生まれてこれたことを、今では本当に良かったと感じています。現代では、妊婦の内に格差が生じているなど、妊娠しても診断されない人がいることを知ってショックでした。3人も子供がいる私の親は幸運だったと思います。現代の日本は少子化が進んでいるといわれていますが、その原因は現代社会そのものが子供を産むことが難しい環境だからではないのでしょうか。産科医が減少していることや、夫婦共働きになって子供を世話する人がいないこともその1つだと思います。私達は日本の将来を、どんな人でも子供を持つことに困ることのない社会にする義務があると思います。

今の私が子供をつくってしまったと仮定すると、おそらく生命をつくった責任を負って、その子供を育てるために学校を辞めて、仕事を探すことになると思います。子供をつくるための性交には衝動的なものがあるかもしれませんが、場合によっては2人の関係に変化をもたらすだけでなく、自分や相手の人生も大きく変えてしまう可能性も潜んでいるでしょう。これからは、新しい生命がどんな存在であるかということを踏まえて生きていきたいです。

★今日、初めてここまで詳しく妊娠と出産について知ることができました。一番驚いたことは赤ちゃんの能力についてです。赤ちゃんは常に受け身の存在で、何もできないと思っていたけれど、誕生前から呼吸・睡眠のリズムなど生まれるための準備をしていたり、1ヵ月後ぐらいから話そうとしたり、様々な努力をしているこ

とがわかり、すごいと思いました。また「親は産むだけではなく、子供が1人で生きていける大人になるまで責任をもって育てていくことが大切だ」と助産師の方がおっしゃっていましたが、本当にそうだと思います。今日、ビデオを見て、第三者である自分にも産まれてきた時の感動が伝わってきたので、親はもっと感動が大きかったらと思います。しかし、感動することは良いことだけど、赤ちゃんはこれから1人の人間として生きていくので、責任をもって育ててあげなければいけないと思いました。最近はお産難民が増え、母親一人で頑張る人もいるそうなので、母親をサポートし良い気持ちで無理なく赤ちゃんを産める環境が整ってほしいです。助産師の仕事についても、感動が大きいとおっしゃっていて興味をもちました。「妊娠と出産」はこれから自分の生きていく中で通る道だと思うので、今日学んだことも意識していきたいと思います。

❖今まで、助産師の仕事について、あまり興味を持っていなかったため、助産師の大変さや仕事のやりがいについてなど全然知らなかった。この特別講義で僕は助産師のことについて少し知ることができたし、興味ももつことができた。特に、『この仕事は大変だが、新たな生命と立ち会える』ということに感動した。

産まれてくる赤ちゃんが死んでいたときは、すごく哀しいということも分かったが、それでも赤ちゃんが産まれてきたときの感動は何にも代え難いくらい大きいと思った。講師の首田さんは、「難産だった赤ちゃんが産まれたときは、特に感動しますね。」と言っていた。そのとき、十数時間も赤ちゃんを産ませるために頑張っていて、その赤ちゃんが産まれたときの感動は想像できないくらい嬉しいだろうなと思った。

また、今のお産の現状についても、首田さんは詳しく説明してくださった。現在深刻になりつつある問題は、お産難民の増加と妊婦の格差であり、特に、妊婦にも格差というものがあることを初めて知りとても驚いた。

今回の講義は、自分にとってすごくためになるお話でいろいろと勉強になったため、違う職業についてもこのように講義を行って教えて欲しいと思った。

❖まず、赤ちゃんはかわいいだけでなく、ものすごい生きるための力を持っていることを知った。胎内で生まれたときのために訓練をしていたり、生後も胎内にいたことを覚えているというのがすごいと思った。また、話を聞いていて、お産はとても大変であることが分かった。お腹が大きくなっていろいろ不便なことがあるが、特に大変そうなのは出産のときだと思う。首田さんはいろいろなお産があると言っていたが、痛みで転げまわる人や叫ぶ人がいたと聞いて、驚いた。それだけ痛いのか、と考えるとやっぱり男で良かったと思った。でもビデオで赤ちゃんをとりあげた時、周りの人やお母さんがすごく感動しているのを見て、自分もこんな風に喜べる機会があるといいなと思った。

ただ衝撃を受けたのは、中絶の方法だ。器具を使って赤ちゃんをかき出すというのは、ほとんど殺人に等しいと思う。だからこそ、このように殺させる命を作らないために、無責任に子どもを作るということを無くす必要があると感じた。

今日の講義を通じて、出産ということの大変さ、赤ちゃんの生命の仕組みなどを良く知ることができた。無駄に殺される命が少しでも減るといいと思う。

❖赤ちゃんは胎内にいる時は、ずっといるだけで何もせず、じっと大きくなり産まれるのを待っているだけかと思ったけれど、羊水を飲んで呼吸の練習をしたり、じん臓でろ過して子宮内の清潔さを保ったりして、いろいろと産まれてくる前から自分で行動しているということが分かった。また産まれて来た赤ちゃんは胎内にいたときの揺れや音楽を覚えており、胎児のころの経験を記憶すると知った。

平均出産時間は12～15時間で、長い人では24時間や48時間かかる人もいるので、出産は本当に体力が必要なことだと思った。

妊娠は、新しい命を授かり誕生させるということだから、軽い気持ちで子供をつくろうとするのはいけない。そして出産で、赤ちゃんが産まれて来た時の感動と新しい命が誕生したよろこびを十分に噛みしめる機会としたい。

❖今日は胎児や産婦人科について話を聞き、新しく学んだ事が多かったように思う。まず胎児はお母さんのお腹の中で生まれるため、生きるために様々な準備を行っている事をDVDで学ぶことができた。産まれ、地上で育つために息をする練習、羊水を飲み、物を食べて育つための練習などがあると分かった。また、胎児はお腹の中にいる、その時から音を聞いたりして、外の世界へ出た時にその事を記憶しているということが驚きだった。

このような胎児の生命力を学びとった後に中絶の問題を聞いて正直怒りを感じた。すでに人間として生きるために努力をしている胎児を殺すのは殺人行為と同じだと思う。胎児の生命力の凄さをより多くの人に知って学んでもらうことで中絶を簡単に行う人は少なくなると思う。

また、胎児の問題だけではなく妊婦の問題についても話を聞くことができた。最近ではお産難民と呼ばれる、お産をする病院が見つからない妊婦がいることや、健康診断を受けずに救急車で運ばれて出産する飛び込み出産が増えていることを学んだ。これらの問題は産婦人科医の減少や母親のお産に対する意識の低さにあるのだと思う。

自分が母親になる前に「自分だったら」ということを考え、決断することがまず必要だと思った。

